



序

まず、本書の出版にあたりご尽力を賜りましたすべての方々に深く感謝申し上げたい。本来、このような大役を仰せつかる立場ではないが、運命の一環として訪れた大事な機会と捉え全身全霊で臨もうと決心しお引き受けした。皆様の助けなくして実現はできず心から御礼を申し上げる。

思い起こせば19年前、歯科医師としての将来に大きな期待と不安を胸に藤本歯科医院の門を叩いたあの日から始まる。師である藤本順平先生には歯科医師としてだけではなく人間としてどうあるべきかいろいろと教えていただいた。掃除、身なり、準備の大切さ、人をもてなす心、自分を律する強さ、忍耐、根性。時代錯誤かもしれないが、私は財産だと思っている。また、歯科医師として、知識・技術だけではなく、『正しくあれ』と思い続ける倫理観を教えていただいた。心に刻んでいる。

師の薦めで一心発起して実現したアメリカ留学では、さらに多くのことを学んだ。世界の大きさ、国・民族・文化の多様性と共通点、学問の奥の深さ、勉強のしかた、そして自分の小ささ。今できることの積み重ねが、目標や目的、自己を実現する唯一の方法と教えていただいた。

帰国後、藤本研修会補綴・咬合コースを微力ながら引き継ぎさせていただき、早いもので3年が経つ。現代の歯科医学、テクノロジー、材料開発のスピードは目まぐるしく、その情報は世界中のどこでもタイムラグなしに入手できる。今思うことは、時代の変化に柔軟に対応する能力も重要ではあるが、時代を問わない物事の本質を見極める力が問われる時代に入ってきているのではないかと感じている。

本書には、藤本先生が40年にわたり伝え続けてきた補綴学・咬合学の原理・原則、そして哲学を盛り込んだ。19年前の自分が抱いた同じ期待と不安を持つ若い世代の先生方に少しでも貢献できたら幸いである。

2018年7月

藤本研修会講師 錦織 淳

歯科医学の一分野として、咬合学——Occlusionという言葉を目にするようになって久しい。従来の、どちらかといえば臨床的研究や経験に基づく考えかたから、近年、咬合をより客観的に科学的に捉えようとする動きが顕著である。咬合学は、いかに下顎の動きに調和した生理学的といえるクラウンや義歯を製作するか、といった補綴学的領域との関連においてのみならず、歯科臨床全体に関する問題として認識されるべきではないだろうか。

1900年代はじめにB.B McCollumなどが顎関節の運動の精密な測定と咬合器による再現に成功し、彼を中心としたナソロジー学派の人々によって現代咬合論の基本となる考えかたが確立したといえる。その後、1960年代はじめにStuartとStallard(1963)はD'Amico(1961)の研究に基づきOrganized disclusionを発表した。これは咬頭嵌合時および側方・前方滑走運動時におけるMutual protectionの考えかたを表しており、ナソロジー的な考えかたとSchyler、Panky、Mannらの支持した機能主義的な考えかたとの統合化を示すものといえる。Mutually protected articulationは、側方ガイドを犬歯単独(犬歯誘導)または作業側の複数歯牙(グループファンクション)とし偏心運動時にDisclusion(離開咬合)を与える、つまりAnterior guidanceを重んずるとする考えかたであり、これは永い間の時の試練を経て現代の有歯顎補綴治療における『咬合の基本』となっている。歯科臨床における咬合の重要性についてはこれまで十分に語られてきたが、最近のインプラント補綴の発達、オールセラミッククラウンやボンデットポーセレンシステムの発達などに伴い、改めて補綴上の咬合の重要性についての意識が高まるべきと考える。

しかしながら、洋の東西を問わず、咬合の治療上の意義について臨床家の間で今一つ理解が得られていないように思われる。ちなみに、2014年、American College of Prosthodontists学会(ACP)で発足された全米から集められたこの分野の教育者による特別チームによる報告では、3世紀に渡って語り継がれてきた多くの咬合に関する研究は、EBMの見地から十分に高いレベルでの根拠を持っているとはいえ、十分な科学的文献の裏付けのあるもの、もしくはコンセンサスを得た情報のみ教育や臨床に応用するべき、と報告している。

現在、米国専門医過程では、世界的コンセンサスに基づく臨床上の咬合理論を教育し臨床応用されている。一方、我が国では特にそれが十分に理解されていないように思う。さらに、あまりにも多くの方法・咬合器システムや咬合測定器具が市場に出回り、我が国における方法論やテクノロジーへの関心の偏りがその傾向を増長させているように感じている。咬合理論を学ぶに当たっては、まず十分な基礎知識を有した上で、精度の高い一定期間以上の濃密な臨床経験を持つことが必要である。その結果、はじめて歯科臨床のなかでの咬合学の意義が真に理解できるようになると思うからである。そのような臨床レベルでの理解、つまり臨床術としての咬合学を身につけた専門家が実は少ないのではないだろうか。真の咬合理論とは、特定の咬合論やシステムを応用しなければならないものであったり、いたずらに複雑で高価な機械を必要とするようなものであってはならないはずで、生理学的見地からより普遍的で機能的なものであり、すべての歯科分野にあてはめることができ、歯科治療を必要とする万人に応用できるものでなければならない。そもそも歯科医学は科学と技術の問題であって、いうまでもなく実際の患者の治療に際して役立つような理論は意味がないわけである。

咬合についてまだ解決されなければならない問題が多くあるにせよ、臨床レベルではかなり整理されてきているのも事実である。補綴分野において咬合理論を実際臨床に生かすためには、アルジネート印象、フェイスボウトランスファー、歯冠形成、精密印象、咬合器の取り扱いをはじめとする基本的な補綴臨床力がしっかりしていなければ到底不可能である。治療後の歯の位置や噛み合わせが診断模型上で術前のそれと異なっていたり、下顎位の決定にあたり咬合採得を間違えれば、いくら精密な咬合器や下顎運動測定装置を用いたとしてもまったく無意味に終わることを知るべきである。

このような見地から本書では前半に咬合理論の解説を、また後半にその理論を実践するために必要な基本的補綴臨床力について述べる。その結果、咬合を真に生かした臨床力のレベルアップが可能となり、読者各自においてただちに臨床に役立てることができるよう考慮した。

“行為なき理論は空虚であり、理論なき行為は暴力である”

—カント—

(Fujimoto 意訳)

2018年7月

藤本順平
錦織 淳